

53章 私たちの罪のために苦しみ死なれる主のしもべ

1節 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。

主の御腕は、だれに現れたのか。

מִי הָאֱמִין לְשִׁמְעַתֵּנוּ וְזָרוּעַ יְהוָה עַל־מִי ^{WTT} Isaiah 53:1

נִגְלָתָהּ:

この節から、語り手は、預言者を含めた新しい民となる。<だれが>という疑問詞で始まるが、疑問というよりも、強い感動を表明する。<私たちの聞いたことを、だれが信じたか>は、52 : 15 の思想の繰返しでもあるし、また、6:9-10 の「心をかたくなにするメッセージ」と直接関係している(→緒論一 d 「イザヤの神学思想」)。イザヤの召命の土台となった「心をかたくなにするメッセージ」が、ここで再び確認される。しかし、それは一転して、<主の御腕は、だれに現れたのか>によって、決定的な解決を与えられる。<主の御腕>は、神の力を表現する象徴的言語である(52:10)。「私たちが宣べ伝えたことを信じることと、主の力の啓示は、同じことの二つの側面である。人間に対する神の御腕の啓示は、力である(→エレ 17 : 5)。それゆえ、宣べ伝えられた知らせを信じることは、主の力が現されたことの証拠である。エジプトからイスラエルを救い出したのは、この力の御腕であった(→51 : 9-10、63 : 12)。そして、この同じ力の御腕が、人を信じさせるのである。この聖句(53 : 1)は、信仰が神の賜物であり、頼りにならない人の力の結果ではないことを示している。また、神がこの力を現されない限り、人は回心することはないことを示している。私たちは神の御国が前進するための働きにおいて、神により頼むべきである」(ヤング)。新約においても、この聖句は、信仰に関する根本的に重要な証言として引用されている(ヨハ 12 : 38、ロマ 10 : 16)。

2節 彼は主の前に若枝のように芽ばえ、

砂漠の地から出る根のように育った。
彼には、私たちが見とれるような姿もなく、
輝きもなく、
私たちが慕うような見ばえもない。

וַיַּעַל כִּיּוֹנֵק לְפָנָיו וְכִשְׁרֵשׁ מֵאֲרֶץ צִיָּה ^{WTT} Isaiah 53:2

לֹא-תֵאָר לּוֹ וְלֹא הָדָר וְנִרְאָהוּ וְלֹא-מִרְאָה וְנִחְמְדָהוּ:

<彼は主の前に若枝のように芽ばえ>は、「彼は、彼(主)の前に若枝のように育ち」である。「主の前に」を新改訳(第二版)は削除したのは非常に残念である。なぜなら、この表現は、主のしもべがその全生涯を「神の前に」あって生き抜きたいという重要な証言となっているからである。しかし、このしもべは、人の前には<砂漠の地から出る根>のように見えた。ここでは当然、11:1が考えられている。後半では52:14の挿入説明が敷衍されている。新しい出エジプトにおいて新しい民を導くべき主のしもべは、神と同等まで高められ神の前に生きる人物でありながら、見たところは普通の人と全く変わりのない姿であったというパラドックスを啓示する。

3節 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、
悲しみの人で病を知っていた。
人が顔をそむけるほどさげすまれ、
私たちも彼を尊ばなかった。

וְנִבְזָה וְחָדַל אִישׁ אִישִׁים אִישׁ מִכְּאֲבוֹת וַיְדוּעַ חֲלִי ^{WTT} Isaiah 53:3

וּכְמִסְתָּר פָּנִים מִמֶּנּוּ נִבְזָה וְלֹא חֲשַׁבְנָהוּ:

<さげすまれ>が二度繰り返される。<人々からのけ者にされ>は、<病を知っていた>と一緒に考えると、らい病を考えていたのかもしれない(→レビ13:45-46、ルカ17:12-13)。ヤングなど保守主義注解者は、すぐイエスを考えるので、イエスが病気になったことはないから、<病>は罪の代わりに用いられていると主張する。しかし原文はあくまでも<病>であって、ここだけ比喩的に解釈する必然性はない。<人が顔をそむけるほど>は、「彼が私たちから(恥と病の故に)顔をそむけるほどであった」とも訳することができる。<私たちも彼を尊ばなかった>は、文字通りには、「私たちは彼を全く問題にしなかった」である。

4節 まことに、彼は私たちの病を負い、
私たちの痛みをになった。
だが、私たちは思った。
彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

אָכֵן חָלִינוּ הוּא נָשָׂא וּמִכְאֲבֵינוּ סָבַלָם וְאַחֲנוּ ^{WTT} Isaiah 53:4

חָשַׁבְנָהוּ נִגְוֵעַ מִכֶּה אֱלֹהִים וּמִעֲנָה:

5節 しかし、彼は、
私たちのそむきの罪のために刺し通され、
私たちの咎のために砕かれた。
彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、
彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

וְהוּא מִחֻלָּל מִפְשָׁעֵנוּ מִדָּכָא מִעֲוֹנֹתֵינוּ מוֹסֵר ^{WTT} Isaiah 53:5

שְׁלוּמֵנוּ עָלָיו וּבְחֻבְרָתוֹ נִרְפָּא-לָנוּ:

イザヤ書の中心であり、第四のしもべの歌の焦点であるが、それだけに解釈も難しく、最後には霊的な導きを求めなければならない箇所である。

まず、**集合説のトーレー**は、4節の<打たれ>がらい病を示唆する可能性は全くないと言い切る。次に、ブッデは、しもべの<苦しみ>とはイスラエルの民の苦しみであるとして、次のように言う。「ヤハウェ信仰の救いを他の国民に伝えるためのイスラエルの使命にとって、その必須条件は、イスラエルの民自身の苦しみであり、困苦である。こうして、異邦人たちは、53:5 後半に見られるように、ヤハウェのしもべイスラエルが、その救いのために苦しんでくれたと言うようになる。また、4節、5節前半、6節後半で言われているように、彼らの罪の贖いのため、彼らに代わって死んでくれたのである。」

一方、**ユダヤ人学者カウフマン**は、同じ集合説でも、義なるイスラエルと一般的なイスラエルの間に区別を設ける。ドラマの語り手である一般的イスラエルが、義なるイスラエルについて歌う。この義なるイスラエルが損なわれ痛めつけられた顔かたちは、イスラエルの低くされた状態と捕囚の苦しみを象徴している。彼は次のように言う。「53:4-6 で、しもべだけが語り手の苦しみを担っているように説明することは不可能である。『彼の打ち傷によって、私たちはいやされた』という表現は、語り手たちもまた病気ですでに苦しんでいたことと、このしもべの苦しみのおかげでいやされたことを意味している。どの節も、この見地に立つて解釈してゆかなければならない。」

これに対して、同じ**ユダヤ人学者オーリンスキー**は、それがだれであれ、イスラエルの罪過のために苦しむ個人のしもべについて語っていると主張する。問題点は、この箇所、代償

的な<苦しみ>について語られているかどうかである。それを判断する資料としては、5 節の<私たちのそむきの罪のために><私たちの咎のために>の<ために>という前置詞に注目しなければならない。これは、ヘミンという理由を表すことばであって、代償性を示すとすれば、前置詞へべを使ったに違いない。そこで、このしもべは<私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた>と言われても、エレミヤやエゼキエルのような預言者たちが同じ理由によって苦しんだのと同じ事実を表現しているのにすぎない、と言うのである。

変わった主張としては、**エンゲネル**が、53 章とタンムズ祭儀との並行性を比較検討して言う。「ここでは、全国民の罪を贖う手段としての新年祭儀における王の代償的苦しみが、古代オリエント全域に見られる祭儀王制イデオロギーの中心テーマの一つであることが明白にされていることに満足しなければならない。そこに見られる概念の基礎としてあるものは、明らかに報復説であり、代償のささげものであり、共同有機体の思想である。」

以上の諸説を注意深く検討するなら、問題点はおのずと明らかになる。それは、集合説か、個人説か、また、預言者自身なのかメシヤなのかという結論を急ぐよりも、まず積義が優先し問題点の整理総合が第一であることを教えてくれる。4-5 節においてまず明確にしなければならないのは、これがドラマ形式による詩文体であることである。そこで、語り手と聴衆、<彼>と<私たち>がだれであるかを、その枠の中で整理してみることである。

次に注目すべきことは、<病>の意味である。集合説では、これを<苦しみ>を表す象徴的表現とし、メシヤ説では、罪を表す象徴的表現とする。また、ユダヤ人の間では、メシヤはらい病であるとの伝承があった。4 節の<罰せられ>は、列王記第二、15 : 5 の「打つ」と同じ語で、レビ記 13 章では、同じことばが名詞形で「患部」として用いられる(3,5,6,29 [疾患] 30,42,31 節ではかいせんの「患部」。2,3,9,20,22,25,47 節ではらい病の「患部」)。旧約における「病」の概念は、現代人の病気の概念と異なり、分析的、病理的でなく、全人的、総合的であり、「やせる」「顔色が悪くなる」「力が抜ける」の三要素から成っていた。そこで、病気と健康の違いは相対的である。それは、病源体や病理現象による判断によらない。なぜなら、「やせる」「顔色が悪くなる」「力が抜ける」ことは、現代の病理学で説明のつかない原因で起こることがありうるからである。失恋はその一例であるが、共同社会から排除される場合や、罪の意識によって病気になり、ひどい場合には、それは死に至る。特に、神との関係が断たれることは、決定的な痛手をもたらす。ただこの場合、罪とさばきとしての病気との関係は、形而上的ではなく即物的にとらえられていた。

第三に注目すべきことは、ここで語り手は、思い付きとか美辞麗句を並べる気持ちでなく、明白な意図、厳しい真剣さをもって、神からの真理を告げようとしていることである。それは<まことに>よって始まり、<彼>と<私たち>の人称代名詞の対置をはじめ、入念に選ばれた一語一語が思慮深く配置されていることから知られる。それゆえ、もしここに述べられている内容が不明瞭であるとすれば、それは語り手の表現力の貧弱さによるのではなく、内容そのものが神の奥義に属するからであり、それは必然的に 53 : 1 に述べられた前提による

のである。

5 節の<しかし、彼は>は強調。<そむきの罪> (へペシヤ) →1:2 注解。<咎> (へアーウオーン) →1:4 注解。<懲らしめ>は、報復的刑罰の意味はなく、矯正と回復のためである。<平安> (へシャーローム) は、何よりもまず神と人の間の断絶の回復を意味している。原文どおりに訳すと、「私たちの平安の凝らしめが彼の上にあった」。本来なら私たちが受けるべき凝らしめが、主のしもべの上にかかり、それで私たちは神との断絶を回復されたという意味である。

6 節 私たちはみな、羊のようにさまよい、
おのおの、自分かつてな道に向かって行った。
しかし、主は、私たちすべての咎を
彼に負わせた。

כָּלֵנוּ כְּצֹאן תְּעִינוּ אִישׁ לְדַרְכּוֹ פָּנִינוּ וַיְהִיָּה^{WTT} Isaiah 53:6

הַפְּגִיעַ בּוֹ אֶת עֵוֹן כָּלֵנוּ:

4-5 節の内容を、違った角度から表明する。それは、羊飼いを失った<羊>たちのたとえで、それぞれ自分勝手に迷って行く。神を捨て神から離れた人は、自分の力と工夫でどのように進んでも、それは結局<さまよい>の道であり、咎ある人生である。また、<おのおの、自分かつてな道>であって、お互いの間に一致はない。<私たちはみな>は、<私たちのすべて>と同じで、初めと終わりに置かれており、一人の例外もないことを強調している。しかし、神はこうした迷える羊を捜し求めるのではなく、これらの羊の咎をまず罰せられる。そのすべての咎を「主のしもべ」の上に負わせると、明白に代償の奥義を告げる。

7 節 彼は痛めつけられた。

彼は苦しんだが、口を開かない。
ほふり場に引かれていく羊のように、
毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、
彼は口を開かない。

נָנֵשׁ וְהוּא נִעְנָה וְלֹא יִפְתַּח־פִּיּוֹ כִּשְׂהָ לַטֹּבַח ^{WTT} Isaiah 53:7

יִנְכַּל וְכָרְחַל לְפָנַי גְּזוּיָה נְאֻלְמָה וְלֹא יִפְתַּח פִּיּוֹ:

6 節の羊のたとえは、7 節において急転換する。6 節では「私たちのすべて」を強調し、すべてが迷い罪を犯したことと、そのすべての咎が「主のしもべ」の上に負わせられたことを示したが、ここでは、「主のしもべ」自身を祭儀のいけにえ用の羊にたとえ、しかも<口を開かない>と、その主体的従順さを強調する。ここで出エジプト伝承における過越の小羊を考えていたことは疑いない(出 12 : 3 以下)。それによってイスラエルの罪は贖われ、彼らは神に打たれることなく、出エジプトを執行することができた。

8 節 しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。

彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。
彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、
生ける者の地から絶たれたことを。

מֵעֶצֶר וּמִמְשַׁפֵּט לֶקַח וְאֶת־דְּרוֹרוֹ מִן יְשׁוּחָה כִּי ^{WTT} Isaiah 53:8

נִגְזַר מֵאֶרֶץ חַיִּים מִפְּשַׁע עַמִּי נִנְע לָמוֹ:

主のしもべの代償的苦難のクライマックスは死であることを明らかにする。<さばき>それ自体は中立的な意味であるが、<しいたげ>と並列されると、不正なさばきの意味になる。<彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ>は、イザヤが独白の形式で語る興味深い文体となっている。内容は 4-6 節の繰返しのようでありながら、<彼の時代>以下の表現で第三者的な客観描写の形をとりつつ「彼」と「私たち」の対比から一歩引き下がって事実を見ようとする。そうでありながら、<わたしの民>によって、イザヤは自分もその共同体の一員であることを忘れない(→6 : 5)。<生ける者の地から絶たれた>は、70 人訳では「殺された」と明確な訳をしている。

- 9 節 彼の墓は悪者どもとともに設けられ、
 彼は富む者とともに葬られた。
 彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。

וַיִּתֵּן אֶת־רִשְׁעִים קְבֻרוֹ וְאֶת־עֲשִׂיר בְּמִתּוֹ עַל

לֹא־חָמַס עָשָׂה וְלֹא מָרְמָה בְּפִיו:

<彼の墓は悪者どもとともに設けられ>は、主のしもべへの迫害と侮辱と誤解が墓にまで及んだことを示している。ローラン・デポーは、イスラエル人の墓の概念を共同体の中で位置づける。すなわち、イスラエル人にとって、墓は、個人のものではなく、家族、親族のものであった。それゆえ、8-9 節に示されているように、無実にもかかわらず、自分の家族の墓でなく、<悪者ども>すなわち死刑者の墓に葬られることは、単なる死だけでなく、民から切り離され、また神から切り離されたことを意味してる。こうして、主のしもべと民との分離を厳しく示すメッセージの意味を汲み取るなら、集合説は 8-9 節において困難に直面する。<彼は富む者とともに葬られた>の原文は、「彼の死において富む者と共にあった」。死海写本では、「彼の死」の代わりに「彼の塚」となっている。この葬りの秘密が、もう一度、主のしもべの無実と柔和さの強調によって浮き彫りにされる。

- 10 節 しかし、彼を砕いて、痛めることは
 主のみこころであった。
 もし彼が、自分のいのちを
 罪過のためのいけにえとするなら、
 彼は末長く、子孫を見ることができ、
 主のみこころは彼によって成し遂げられる。

וַיְהִי חֶפְזָן דָּכָאוֹ הִחְלִי אִם־תִּשִּׂים אֲשָׁם

נַפְשׁוֹ יִרְאֶה זֶרַע יִאֲרִיךְ יָמָיו וְחֶפְזָן יִהְיֶה בְּיָדוֹ יִצְלַח:

4-5 節で「彼」と「私たち」の対比が、6 節で「私たちのすべて」が、7 節で「口を開かない」が、8 節で「死」が、9 節で「墓」が、それぞれ繰り返されて、その節の焦点を示していたように、10 節では<主のみこころ>が繰り返されて焦点を示している。7-9 節では、主のしもべの示す死に至るまでの従順と、それに対する人々の誤解と侮辱について述べられたが、10-12 節では、神の側から見た主のしもべの生涯と死とその働きについて述べられる。<痛める>は「病気にする」(3-4)。<罪過のためのいけにえ>の根本理念については→民数記 5 : 5 以下、レビ記 5 : 14-19、7 : 1-7、14 : 12-31、19 : 20-22。<子孫を見る>は、主のしもべがすでに死んで墓に葬られた後であるから(→8-9)、復活を意味している。なぜなら、死人が<見る>ことはないからで

ある。主のしもべは、自分のいのちを罪過のためのいけにえとしてささげ、苦しみ死ぬこと
によって、イスラエルを新しく生まれ変わらせるだけでなく、自分も生き返ってそれを見る。
<未長く>は、文字通りには「その日を長く延ばす」で、主のしもべが永遠に生きることを示し
ている。もちろんここでは、ダビデ契約が考えられている(→II サムエル 7 : 13,16、詩篇 89 :
4、132 : 12)。<主のみこころ>は、主のしもべを砕くことと、主のしもべを永遠に生かすこと
の両方にかかっている。

11 節 彼は、自分のいのちの

激しい苦しみのあとを見て、満足する。

わたしの正しいしもべは、

その知識によって多くの人を義とし、

彼らの咎を彼がになう。

צָדִיק מֵעֲמָל נִפְשׁוֹ יִרְאֶה יִשְׁבַּע בְּדַעְתּוֹ יִצְדִיק ^{WTT} Isaiah 53:11

צָדִיק עֲבָדֵי לְרַבִּים וְעֹנֹתָם הוּא יִסְבֹּל:

10 節後半から、主のしもべが高く上げられることについて述べてゆく。それは 52 : 13 の
テーマへの回帰とも言える。主のしもべは、今や苦しみそのものではなく(→50 : 6、53:7-9)、
苦しみの結果を見て満足する。<その知識>の<その>は、主体を表す代名詞が、目的を表す代
名詞かによって意味が違ってくる。前者であれば、主のしもべが持つ知識になる。コリント
人への手紙第一、13 : 12 に「私が完全に知られている」とあるように、主のしもべはその民す
べてを知っている(→イザヤ 11 : 2)。後者であれば、主のしもべを知る知識という意味になる
(→ヨハ 17 : 3、ロマ 10 : 14)。文法的にはどちらが正しいとも言えない。<義とする>は、ヘツ
ァーダクの使役語幹で、ヘツェダーカーはこの動詞に由来する(→5 : 16 注解)。<義とする>
と<咎を彼がになう>は、未完了時制で、死んで後、よみがえり、永遠に生きる主のしもべが、
いつもその民を義とし、咎を担うという真理性を表明している。

12 節 それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、
 彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。
 彼が自分のいのちを死に明け渡し、
 そむいた人たちとともに数えられたからである。
 彼は多くの人の罪を負い、
 そむいた人たちのためにとりなしをする。

לְכֹן אֶחְלַק־לוֹ בְּרַבִּים וְאֶת־עֲצוּמִים יִחְלַק ^{WTT} Isaiah 53:12

שָׁלַל תַּחַת אֲשֶׁר הָעֵרָה לַמּוֹת נַפְשׁוֹ וְאֶת־פְּשָׁעִים נִמְנָה

וְהוּא חֲטָא־רַבִּים נָשָׂא וּלְפִשָׁעִים יִפְנִיעַ: ס

<それゆえ>は、しもべの無実の苦しみと死、民の咎のための代償的犠牲、その復活後のわざのすべてにかかっているととるのがよい。11-12 節では、語り手は主ご自身になっている。主のしもべの働きの報酬の大きさは、戦勝後の戦利品のたとえによって示されている。そしてもう一度、中心的思想が繰り返される。それは、罪の償いのための死によるということである。ここでは<そむいた人>が繰り返されるが、これは、ヘパーシャの分詞形(→1 : 2 注解)。また<罪>の語源はヘハーター(→1 : 4 注解)。

<とりなしをする>で 53 章は閉じられる。それは、そむく者の側のわざではなく、主のしもべの側の絶えざるわざによってのみ解決の道が開かれることを、未完了時制によって、示している(→ヘブ 7 : 25)。とりなしの例は、旧約聖書に多く見出すことができる。アブラハム(創世記 18 : 22-32)、モーセ(出 32 章)、アモス (アモ 7 : 1-6)、エレミヤ (エレ 7 : 16, 11 : 14, 15 : 1)、エゼキエル (エゼ 14 : 14-20)。しかし、自分のいのちを罪過のためのいえにえとしてささげ、多くの人を義としながらも、自分も生き返り、いつまでもとりなしをする「主のしもべ」は、どこにも見出すことができない。イザヤは、その生涯を通じての「心をかたくなにするメッセージ」の答えを、啓示により終末的なメシヤ像の中に見せられていると考えざるを得ない。

しかし、イザヤはこの啓示を、教義学の公式図ではなく、ドラマ形式の詩文体によって伝達するように迫られた。1-6 節の語り手と「私たち」はだれを指すか、7-9 節の語り手と「わたし」はだれを指すか、10-12 節の語り手と「わたし」はだれを指すか、自明のようであって、実は困難な問題を含んでいる。しかし、語り手の転換と、複数者から個人、また、主観的判断と客観的事実の交互の描写を通して、聞き手は、このドラマの中に引きずり込まれ、<彼>すなわち主のしもべとのかかわりの中に巻き込まれるように書かれている。一言で言うなら、心で読むように書かれているのである。